

早稲田大学ラグビー蹴球部の歴史と伝統

History and tradition of waseda rugby football club

1K03B172-0

松澤 良祐

指導教員

主査 作野誠一先生

副査 中竹竜二先生

序章

筆者は早稲田ラグビー蹴球部に4年間在籍してきた。この4年間で経験した数多くのことをもとに、早稲田ラグビー蹴球部の歴史や伝統、またいかにして早稲田ラグビー蹴球部が組織としての型を作っていたのかを明らかにする。早稲田ラグビー蹴球部を組織として解明していくことで、さらにその他の組織と比較していくことで、組織の良し悪しやこれからの社会で組織として何が必要なのかを探求していきたい。

第1章 早稲田ラグビーの伝統と変遷

大正 7(1916)年11月7日。この日が早稲田大学ラグビー蹴球部の創立の日である。初代の主将を務めた井上成意が『Waseda Rugby Football』第4号でどのように語っている(日比野、2007:6)。

ラグビー部が早大体育会に正式に加入を認められた時の名称は「早稲田大学蹴球部」であった。慶応大学では今でもなおラグビー部は蹴球部という名前で登録されているが、早稲田もその産声を上げた当初は蹴球部であった。その後サッカー部が加入し、ラグビーはラ式蹴球部、サッカーがア式蹴球部と正式名称するようになったのである。大正7年の秋、本格的活動に入った井上成意らは、「新人歓迎の虎肉試食の会を催すから、奮って参加されたい」という掲示を学生控え室に張り出したのだ。この会では実際に虎肉を試食しているのである。これは当時盛況を振っていた慶応大学蹴球部へのあてつけであったと言われている。

第2章 早稲田を作り上げた監督たち

筆者が1年生で入部した時の監督が清宮克幸である。この人にはそのあと3年間お世話になることになる。この人に会ったときの第一印象、それは威圧感であった。ものすごい眼の力、そして、この人が発する言葉の一語一語にこもっている力の強さに驚かされた。

平成 13(2001)年に清宮克幸は監督に就任した。主将は左京泰明が就いた。就任が決まった時、選手たちからの承認が得られなかったことはあまりにも有名な話である。早稲田は監督につく時に選手の承認を得るといった独特の風習がある。今では、ラグビー界を牽引しているリーダーとなっている清宮克幸もはじ

めから順風満帆とは行かなかったのである。

そのため、ファーストミーティングで清宮監督はパソコンを使ったプレゼンテーションをして、「こうすれば勝てる」という明確な目標と問題提起をし、それまでは5～6時間行われていた練習を2時間にするという宣言までやってのけたのである。その年、平成13(2001)年は大学選手権準優勝、翌平成14(2002)年には13年ぶりに早稲田を大学選手権優勝、日本一の座につかせたのである。

第3章 組織としての早稲田大学ラグビー蹴球部

本章では組織について記載した。その結果早稲田大学ラグビー蹴球部はその組織体系もしっかり体系化され、組織としての機能が細分化されているということがわかった。どの部署がどの仕事を行うのか、誰がその仕事を行うのかまで細分化することで、仕事効率を上げると共に、精度も向上させているのである。選手が1試合を行うために裏ではその何倍以上の人が支えているのである。

第4章 ワセダクラブの意義

現在、早稲田大学上井草グラウンドではNPO法人ワセダクラブも活動を行っている。これは大人から子どもまで気軽に早稲田のラグビーに触れることができるようにすることを目的に設立された。ここでは特にその意義を考えていきたい。ワセダクラブの基本理念として“プレイヤーズ・ファースト～選手中心の考え方～”という考え方がある。プレイヤーの楽しみ、意志、成長が最も重要であり、全ての成果は、プレイヤーのものであるという考え方だ。

第5章 これからの早稲田大学ラグビー蹴球部のありべき姿

今後の早稲田は、その時代のにおいを敏感に嗅ぎ取って、最先端に行く組織である必要がある。そのために、さらに外国の知識を取り入れたり、時には温故知新、過去に振り返り視野が狭くならないような組織として成長を遂げていく必要があるのだ。早稲田大学ラグビー蹴球部はいかなる試合においても負けることは許されない。この常勝の理念に邁進するために、自らの殻を破り広い世界に羽ばたいていき、その名を社会に浸透させていくのである。